

新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第4回】徐州会戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十三年四月十五日、北上作戦に関し師団は遂次兵力を懷遠、蚌埠間に集結させ、津浦線を修理し道路補修資材を収集、重車両を通しうる軍橋を架設、且つ同地に補給基点を推進する等、極秘裏に作戦準備を行った。

聯隊も又以上の準備をなすと共に、爾後の攻撃準備の為、諸偵察に全力をつくした。

師団の作戦方針は、有力な一部を以って、北肥河南岸地区を突進し、宿縣、蒙城道を遮断せしめ、主力は二縦隊となり支子湖附近の敵を捕捉殲滅し、一挙に蒙城に迫り、南北呼応して蒙城を攻撃するものであった。

徐州大包囲戦の幕を開けるや、聯隊は師団主力方面の左縦隊に属し、支子湖附近の敵陣地攻撃を命ぜられ、五月四日夜行動を開始した。第三大隊を前衛とし懷遠を出発、新庄に向った。敵前進陣地を猛攻し夜襲を以って劉田郢及び獅子洞を奪取したが、敵陣地は我が軍の徐州進撃を予測し、至る所に鉄条網、戦車壕の障害を構築し頑強なる抵抗を行った。

聯隊は飛行機・戦車・山砲の協力の下に五日払暁より第三大隊及び戦車中隊協力の下、支子湖の堅陣を攻撃開始、遂次右方向より之を包囲しつつ果敢に力攻、〇九一〇之を占領した。第二大隊は概ね第三大隊に連携し大明咀の線に進出し、一三三〇支子湖西側の主陣地に対する攻撃の準備を完了。岩仲戦車隊・飛行隊・砲兵の協力の下攻撃開始、一五四〇敵陣地を突破し、破竹の勢いを以って前進又前進。敗退する敵を急追して一七五〇馬廠及び其の南方の無名部落に進出、完全に之を占領し爾後の追撃を準備した。

この日軍司令官、師団長は、懷遠南側荆山に登り、聯隊の戦闘を眼下に視察した。その時の感想が次の様に記述されている。

「軍は本五月五日、端午の節句をトして、本歴史的大会戦の幕を落せり。師団長以下早朝より幕僚を従え、荆山に戦闘司令所を推進し眼下に展開せる諸隊の勇戦奮闘の状を目撃しつつ、その戦闘を指導せり。軍司令官、駒を荆山に進め具に戦況を視察す。旭光大理の露岩に輝き緑の分光を中空に放ち、山麓の榴樹花紅にして緑葉に映し、鱗片なき濃紺色の気球は五月鯉を表して、敵陣を押し飛機交々至りて戦勝を予祝するが如く、その壯観勇絶、例えうるに言なし。実にこの日の戦闘は順調といわんか、好調といわんか、真に時計の針

の刻むが如き正確さを以って進捗を見たることは、征戦久しきに亘り大小幾多の戦闘を交えしと雖も、未だ如斯を見ず。

殊に歩兵第百十六聯隊、支子湖附近の陣地攻撃の如きは歩、戦、砲、飛、協同の精華にして、平時に於ける模範演習と雖もその遠く及ばざる所なり」

五月十一日師団は、三縦隊となり重点を中央に置き永城に向うことになり、歩兵第二十六旅団（歩五十八聯隊欠、山砲兵十九聯隊、重砲一、工兵十三聯隊を基幹）は中央縦隊、聯隊は前兵となり一一〇〇前進、途中敵と衝突することなく、丹城を経て十三日午後永城に達した。

五月十四日、「徐州附近の敵は退却を開始せるものの如し、第十三師団は速やかに碣山東方に於いて隴海線に沿う敵の退路を遮断すべし」の軍命令に接し、師団は二縦隊となり、隴海線に進出し次いで徐州に向い前進するに決した。聯隊は〇五〇〇左縦隊の前衛となり、黄口に向い前進、途中劉庄西側を北進中、前兵は突如兵力未詳の敵と衝突し直に之を攻撃開始した。前衛は山砲隊及び本隊の一部の協力の下、一二一〇劉庄を占領、同地で大休止後予定の線に向い前進した。

五月十五日〇六〇〇宿营地出発、西鎮店の線に向い前進、途中正規兵約二十名を撃退し、王半集孫楼西王庄の線に進出した。

五月十六日、聯隊は第一線となり黄口附近の敵を攻撃、第一大隊を右、第二大隊を左第一線とし、〇八〇〇迄に隴海線を遮断、直ちに隴海線上の列車を攻撃、次いで黄口附近の敵を猛攻、之を追尾東進すること暫し、一二〇〇劉庄に進出、黄口駅を占領し隴海線を完全に遮断した。

五月十七日〇六〇〇出発、尖兵中隊が劉土楼に前進するや、同地附近の敵より猛射を受け、第二大隊は展開して之を攻撃、聯隊は山砲及び聯隊砲、歩兵砲を之に協力し力攻、第一大隊を隴海線に沿う地区に展開、当面の敵を攻撃した。劉土楼附近は敵の抵抗頑強にして攻撃意の如く進捗せず、一三〇〇戦車一台の協力を得て怒濤の勢いを以って攻撃前進し郝寨駅を占領した。依然攻撃を続行せしも、郝寨村落の敵は圉壁を利用し堅固なる工事に依り頑強に抵抗した。歩兵砲、山砲中隊、迫撃砲小隊等の決死的波状射撃に依り、薄暮を利用し第二大隊は之に突入、白兵戦を行い翌十八日〇三〇〇之を占領した。

五月十八日〇六〇〇、聯隊は夾河寨に向い前進中、旅団命令に接し、「爾後旅団の左翼隊となり、新劉庄、王門の敵を攻撃せしむ」の命があったが、同地附近の敵は歩五十八聯隊に之を攻撃させるに変更あり、一時部隊を半歩店に集結し、大北望及び小北望高地に対する攻撃を開始した。

第一大隊を右、第二大隊を左第一線とし、一八三〇攻撃前進、翌十九日〇一〇〇、小北望占領、第二大隊は〇五四〇砲兵の協力の下大北望高地の一角に突入し、聯隊長は予備隊と共に軍旗を先頭に第一線の戦果を拡張し、大北望高地に突入した。

然るに頂上付近の敵頑強に抵抗せるを以って直ちに重火器部隊を山頂に推進し敵を猛攻、敵の一部は南方より我を背射、又第一大隊は小北望南方高地より側射を受け、攻撃意の如く進捗せず、一一〇〇態勢を整え力攻を重ね、一三〇〇遂に最高地に突入、之を占領した。

聯隊は直ちに徐州に向い敵を急迫、一七五〇徐州城外に進出、一八〇〇徐州城に入り同夜その西側地区に宿営した。

我が南北両方面よりの攻撃により、徐州附近の敵は一部を以って其の西側高地に於いて頑強に抵抗、其の主力は南方或いは東南方に集結し、遂次脱出を図った。

五月二十日、師団は徐州占領後、徐州南側に兵力を集結、爾後の追撃を準備するに決した。

徐州会戦に於いて、我が軍は巧みに敵の大軍を包囲したが、兵力寡少の為敵の戦場離脱を容易にし、惜しくもその主力を逸脱せしめた。

北支軍は主として西方に、中支軍は南方に敵を追撃し、第十六師団（京都）は五月二十六日蒙城附近に、第三師団（名古屋）は三十日懷遠、蚌埠間に集結し、第九師団は蘇州附近に在った。五月下旬淮河以南、揚子江以北にある敵は約十五個師と算した。

聯隊は五月四日夜行動を開始し、徐州占領まで僅か半月間に三百数十キロを突破し、その機動の迅速なること世界戦史上嘗て見られないところである。徐州附近で敵軍主力を捕捉撃滅して、今次事変の終結を期せんと勇躍猛進したが、大魚を網の隙間から逃がしたことを思うと、洵に遺憾であって、千歳の痛恨事とするものであった。

（参考文献「新発田聯隊史」「聯隊歴史 歩兵第百十六聯隊」より）

この作戦地一帯は、見渡す限りの麦の大平原で、聯隊はその中を進撃した。

軍歌「麦と兵隊」（火野葦平作）の一節に、「徐州々々と人馬は進む 徐州居よいか住みよいか 洒落た文句に振り返りゃ お国訛りのおけさ節 髭が微笑む麦畑」と歌われていますが、正に第十三師団、第二十六旅団隷下の新発田歩兵第百十六連隊の情景を歌ったものであろう。